

川端康成 文学の舞台 北條 誠

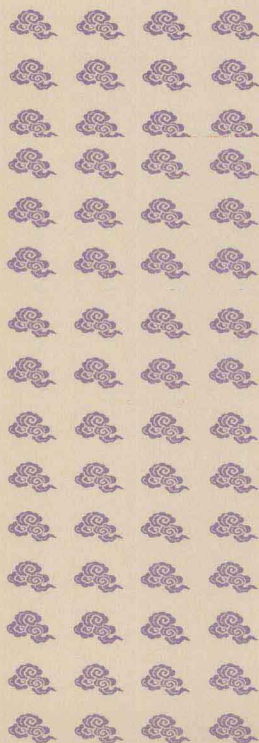
歴史と文学の旅

● 平凡社



歴史と文学の旅
平凡社

川端康成
文学の舞台
北條 誠



歴史と文学の旅 川端康成・文学の舞台

昭和48年 2月20日 初版第1刷発行

定 価 750円

著 者 北條 誠

発行者 下中邦彦

発行所 株式会社 平凡社

東京都千代田区四番町 4 番地 1

郵便番号 102 振替 東京 29639

電話東京 (03)-265-0451

印 刷 株式会社東京印書館

フォト・タイプ株式会社

製 本 和田製本工業株式会社

© 北條 誠 1973

0326-438060-7600



伊豆の踊子





昔の面影を残す福田家の浴場



清冽な岩清水で育つワサビ沢

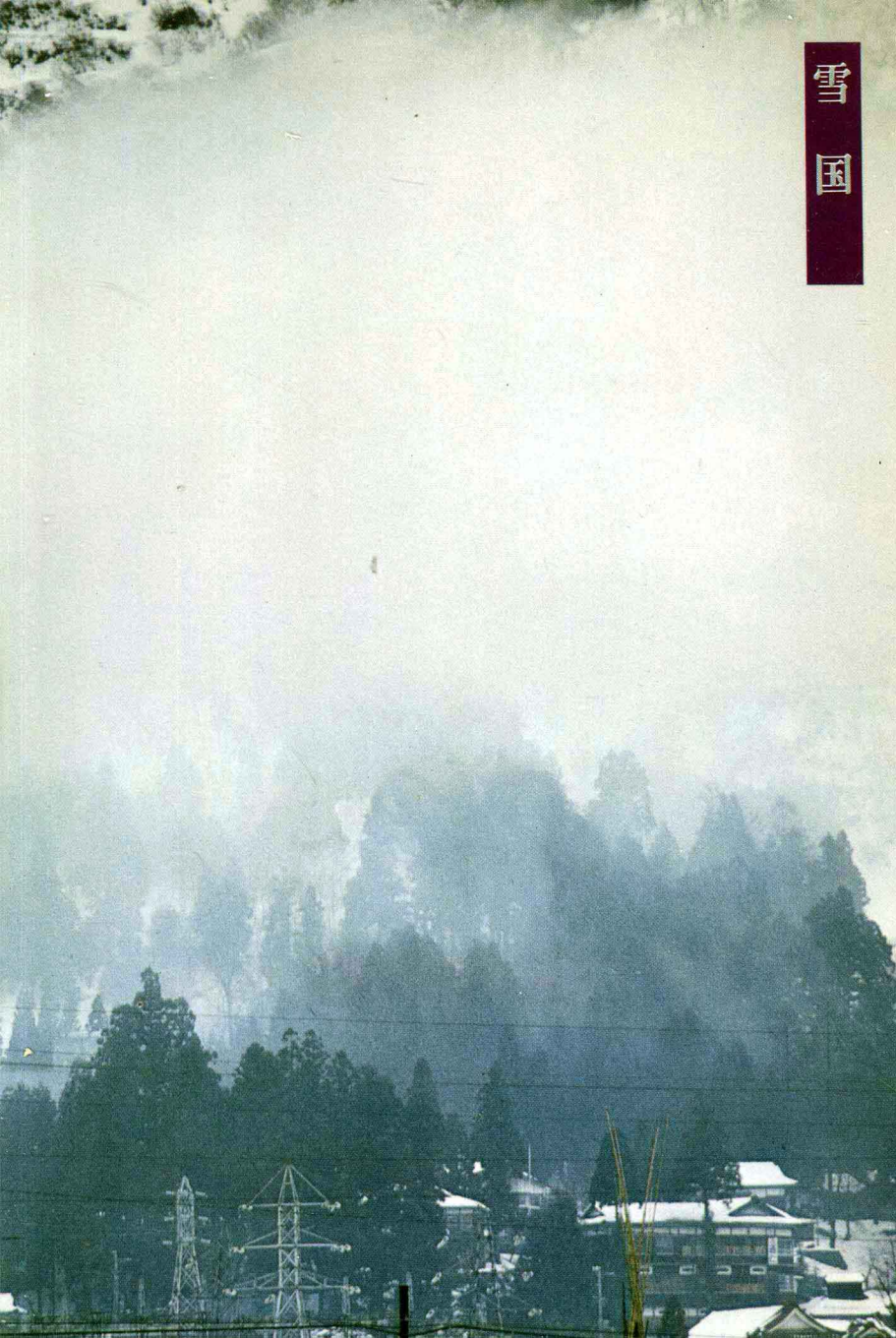
川端康成が『伊豆の踊子』を執筆した当時のままの部屋。湯ヶ島、湯本館





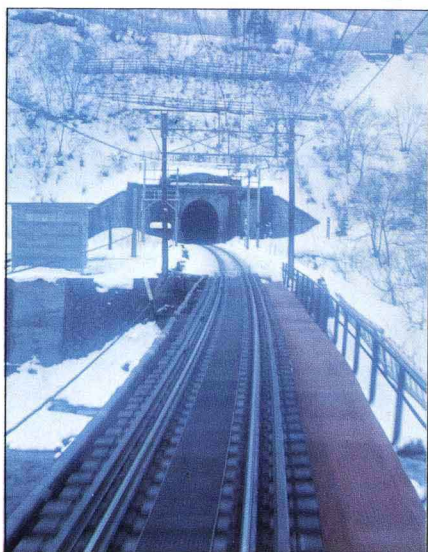
河津七滝の一つ、釜滝。22メートルの高さから轟音を上げて滝つぼに落ちる

雪国





本当に人を好きになれるのは、女だけだ、という駒子の哀しさが、はてしなく雪原に広がる
葉子の声が、いまにも響くようなホーム かの旧清水トンネルは今は上り線のみが通る

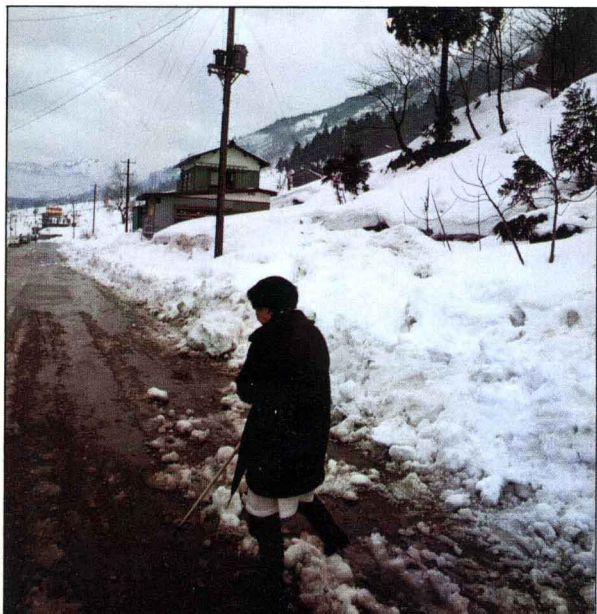




川端康成が越後湯沢を訪れるたびに泊まった高半旅館の「かすみの間」



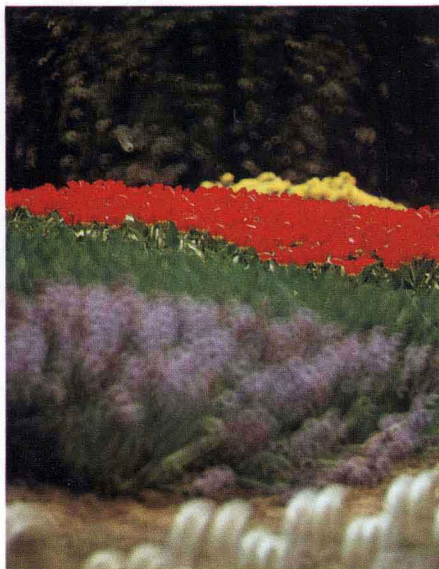
山姥姿の藝者たちが、ときにみられるのも、雪深い山里らしい客に招かれて、旅館から旅館へと、雪解け道を按摩が歩いていく







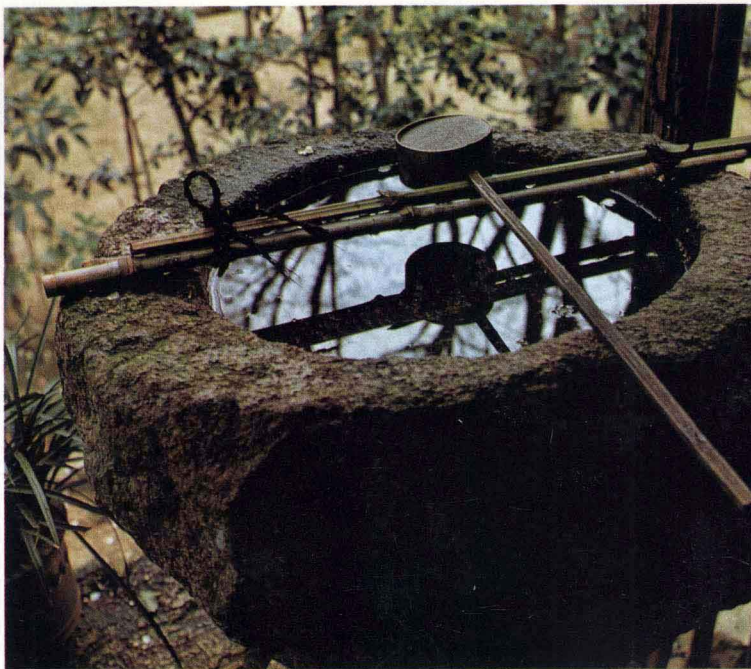
鳥居を切って並べたような、円い飛び石が並んでいる、平安神宮の神苑の中の、沢渡り
 春の夕暮、千重子が真一と行く清水寺 京都の春は、植物園の花壇も、紅一色に染める





葵祭りには、人々は平安の貴族に扮して、馬や牛車を混えて練り歩く





嵯峨の竹藪の、透き通るような翠の中の尼寺で、太吉郎は帯の下絵の想を練る
千重子は、中京の呉服問屋の娘だった 尼さんがひっそりと暮す直指庵





時代祭りの日、苗子は秀男の織ってくれた帯をしめて、御所の前で彼を待つ



此为试读, 京都の古い家には、いまでもくどがあり、荒神さまがまつてある
需要元釜PDF请访问: www.ertongbook.com